

第33回平和祈念コンサート 講演会

【西村 昭彦氏】

皆さん、こんばんは。ご紹介を受けました西村でございます。

私は昭和8年生まれなので、現在92歳になります。4歳から12歳まで、江古田駅北口にあります武蔵野音楽学校のすぐそばの、板橋区小竹町に住んでおりました。練馬区が板橋区より独立しましたので、現在は練馬区小竹町になりました。

当時、私の家族は両親、祖母、二人の弟と妹の7人家族でございました。

昭和15年4月に、私は板橋区開進第三尋常小学校に入学いたしました。翌年の昭和16年には国民学校令が公布されまして、尋常小学校という名称が国民学校に変わりました。当時は今と違ひまして、男女は別々のクラスでございました。教室も離れておりましたし、習う教科も少し違ったようでございます。

学校の正門を入りますと、右側に奉安殿という建物がございました。奉安殿には当時の昭和天皇と皇后、それから教育勅語が納めてありました。登下校の際には必ず全員、奉安殿の前で最敬礼をして通りました。

昭和16年の12月8日未明、日本がハワイのオアフ島にありますパールハーバーを攻撃しました。それから、太平洋戦争が始まります。私は小学校2年生でしたので、6年の夏の終戦まで、約4年間戦争が続きます。

開戦日が8日だったので、毎月8日には、1時間目の授業時間に、戦勝祈願のために5・6年生が交代で鼓笛隊を先頭に、近くの氷川神社に参拝しました。そういう行事がございました。

戦況が次第に悪くなってきますと、軍事物資優先のためなのか、ほとんどの生活必需品が配給制となりました。配給されるお米は玄米で、一升瓶に入れて細い棒で何百回もついて精米をしたのを覚えております。

配給制では家族分の食べ物が十分ありませんので、イモ類や野菜や卵を手に入れるために、父親と電車で秋津や所沢方面の農家まで買い出しに行ったものです。買い出しと言ってもお金ではなく、家にある帯や着物、そういうものを持って食べ物と交換してもらっておりました。

遠くまで買い出しに出かけましても、時には「ウチには（分けてやるものは）何もねえよ！」と怒鳴られたり、せっかく手に入れても、ツルが出てしまった後の霜げたサツマイモや、しなびた菜っ葉でございました。

小学校には4年生ぐらいまでは弁当持参で行きましたけれども、だんだんと空襲が激しくなってきましたので、6年生の初め頃には、学校は午前授業になりました。

学校では味噌の塗られた握り飯や小さなコッペパンが配られましたので、それを持ち帰って、弟たちと一緒に食べました。

江古田駅近くの大きな蕎麦屋では、雑炊を配給・販売することになりました。母親に頼まれまして、鍋と配給券を持って何回か長い列に並んだこともあります。せっかく並んでも売り切れてしまい、買えないこともありました。その頃の雑炊は汁の中には野菜の切れ端ばかり、米粒が泳いでいるようなものです。量も少なかったもので、家に帰ってすいといと混ぜて食べていました。

現在光が丘公園がある場所には、戦時中、陸軍の成増飛行場がありました。私は非常に飛行機が好きで、その中でも大好きだった零戦をどうしても見たくて、友達4、5人と1時間かけて歩き、金網越しに見たことがあります。格納庫に入

っている飛行機もありましたけれども、思ったよりも本物の飛行機は少なく、軍機に見せかけた木造の飛行機もありました。その帰り道に 2、3 匹の野犬が歯をむき出して追いかけてきて、足がすくむほど恐ろしくて、中には転んだ友達もいました。友達と団子状になって石を投げ、必死に逃げ帰り、怖い経験をしました。

昭和 17 年、小学校 3 年生の 4 月に、初めて家族で川崎大師にお参りに行きました。その時、何か騒々しいと思っておりましたけれども、帰ってラジオを聞くと、本土への初めての空襲だということがわかりました。航空母艦から、ノースアメリカン B-25 という飛行機が数十機飛んできて、横浜・川崎の京葉地帯、または東京の荒川区あたりを爆撃していったようでございます。

5 年生の終わり頃の 3 月 10 日には、東京大空襲がありました。自宅付近には特に被害がなかったので、その頃はまだ空襲の怖さを知りませんでした。しかし、4 月に山の手の池袋周辺が大空襲にあい、B-29 が落とす照明弾や下からのサーチライトの明かりで、自宅辺りまで空一面が明るく照らし出されました。夜中にもかかわらず、まるで昼間のような明るさで、自宅の近くを低空飛行で飛んでいた B-29 の搭乗員の姿が見えるくらいでした。

池袋方面の東の空一面が真っ赤になり、家の木材が燃える音がパチパチと聞こえ、ものすごい強風に乗って煙や火の粉が飛んできました。自分の家まで燃えてしまうのではないかと、非常に心配で怖い思いをしました。

6 年生に進級した 4 月の末のある日、通学している学校近くの道路に爆弾が落ちて、大穴が開いていることを家の近くの人から聞き、物珍しさもあって弟と見に行きました。行ってみますと、直径 6～7 メートルの大きなすり鉢状の穴が開いておりました。後で知ったことですが、それはゼンマイ仕掛けの時限爆弾だっ

たそうです。他の場所では、小学校の生徒が突然の爆発で命を落としたことをニュースで知り、父母からこっぴどく叱られました。

5月になると空襲がますます激しくなりました。昼間には空が見えなくなるぐらいの数のB-29が低空で編隊を組み、轟音をとどろかせて北の空へ向かって飛んでいくのを、何回も目にしております。しかし、迎え撃つ日本の戦闘機の姿が見えず、とても悔しかったのを覚えております。

その頃から、夕方になるとこの家でも雨戸を閉めて、電球のついた傘には黒い布をかぶせ、光が外に漏れないように灯火管制が義務づけられました。夜になると暗くて何もすることができず、子どもたちは早く寝るより仕方ありませんでした。

昭和20年頃から疎開する人たちが増えてきました。ご承知のように疎開には、田舎に親戚や知人があって、そこに家族と移り住む「縁故疎開」、そういう頼れる人がない場合には、小学校3年生以上の子どもたちが親と離れて、学校単位で、近隣にあるお寺や旅館で先生や寮母と生活する「学童疎開」がありました。

こうした事情もあり、開進第三小学校も群馬県の磯部に疎開し、学校の児童数もぐっと減りました。

空襲に備えて、学校の校舎の下には防空壕も作られました。授業中や帰宅時間に急に現れる艦載機——艦載機というのは、東京湾入口に待機している航空母艦から発進する小型の戦闘機です——この艦載機は爆弾がなくなると空母まで戻って、再び弾薬を積み込んで何度でも繰り返して飛んでくるので、空襲が1日中続くこともありました。この急に現れる艦載機による空襲には、学校の地下壕に逃げ込んだりしたこともあります。いつになったら家に帰れるのだらうと、地下壕

の中でとても不安なこともありました。

その頃、隣の家の風呂場の土間に不発弾が落ちたということで、大騒ぎになりました。見せてもらったところ、25～30センチぐらいの銃弾に、サメの絵がペンキで描かれていました。その不発弾は、町会の警防団が持ち帰りました。アメリカには、このような銃弾1発1発にまで絵を描くほどの余裕があるのだなと、未恐ろしく感じました。

江古田駅近くの武蔵高校の屋上には、その艦載機を撃つための機関砲が何台も据えてありました。また、自宅近くには、米軍機を撃墜するための砲台を置いた高射砲陣地もありました。ある日の午後、そこの兵舎から兵隊たちが、自宅近くの武蔵野音楽学校の講堂まで、列を組んで行進していました。南方に送られる兵士たちへの壮行会だったようです。近所の人たちも招待され、淡谷のり子や灰田勝彦などの歌手や漫才師たちの余興があり、私も兄弟と一緒に見に行きました。

いよいよ空襲も激しくなった頃、5月末に父の知り合いのある群馬県に、家族と疎開することになりました。江古田駅にある神社の境内で弟と遊んでいましたところ父がやってきて、「今から群馬県に疎開するぞ」と言われ、急いで帰宅して荷物をまとめ、昼食もとらずに家を出ました。

翌日、今はわたらせ溪谷鉄道と言っておりますが、当時は足尾線と言いまして、足尾の銅山まで桐生から列車が走っております。その桐生から1つ目の大間々というところに疎開をいたしました。疎開した場所は、4キロほど歩いた山の中にありました。瓦屋根のある立派な母屋の裏にある2階建ての蚕小屋が、私たち家族の住む場所になりました。

東京と違ってガス・水道・電気・トイレもありませんでした。子どもたちにとって非常に困ったのは、近所に野良仕事に出た母屋の人が使うトイレが、40～50

メートル離れたところにありました。雨が降った日とか夜尿意を催した場合には、怖くて一人では行けないので、母親に連れて行ってもらったことがあります。

東京から送ってあった荷物を片付けた後、父は東京での仕事があるために、1泊した後に、別れを惜しんでまた東京に戻ってまいりました。その後、父は東京から何回か、大きなリュックに野菜や食料を詰めて会いに来てくれたのが、非常にうれしかったです。

疎開先は、田んぼが少なく米が採れないために、乾麺やすいとんを使った食事が多くて、具材には裏山で採れたミョウガや三つ葉、ノビルなど、たまに母屋からいただいたカボチャなどを入れて食べることもありました。乾麺二束を家族6人で食べたこともあります。この頃にミョウガを食べ過ぎましたので、ミョウガはもう食べたくありません。

新しい学校は家から15分ぐらいのところにありまして、翌日から転入しました。川向こうには、練馬区から集団疎開をしている子どもたちが住んでいるお寺がありました。東京と同じく男女別クラスで、午前授業が多く、授業のほかに、山で焼いた木炭や切り出した材木の薪を山から麓まで背負い下りてくる仕事を、何回か経験しました。

また、時々6年生の男子は出征して男手のない農家に行きまして、畑を耕したり草むしりをしたりする作業を手伝いました。都会の小学生にとってはとてもつらくこたえる仕事でしたが、おやつとして、ザルに入ったジャガイモやサツマイモが桑の木の枝に吊るしてありました。空腹を満たしてくれたのがとてもうれしかったし、今でもこの光景を思い出します。

体育の時間は「鍛錬」という科目になりまして、退役した兵隊が学校に派遣されて、軍事訓練のようなものになってまいりました。木刀を使っての剣道のようなことをやらされ、上手いかなと大声で怒鳴られ、たまにはビンタが飛ん

できました。学校には木刀がたくさん備えてありましたけれども、ある時、「貴様らの魂を入れた木刀を作ってこい」ということで、山に行って木を切り、木刀を作らせられました。

また、7月の暑い日の下校時、地区の班長として7、8人の下級生を引き連れて歩いていると、遠くから急に飛行機の飛んでくる音がしました。田舎の子は珍しさもありまして、その飛行機をじっと見つめておりました。私は東京でよく目にしたアメリカの戦闘機だと分かったので、「早くそこの林に隠れろ！」と怒鳴りました。その時、旋回して戻ってきた戦闘機は、低空でダダダダダッと機銃掃射を始めました。

東京で艦載機の怖さを知っておりましたので、「飛行機が見えなくなるまでその林から出てはだめだ」と下級生に知らせました。しばらくたって戦闘機の気配が全くなくなりましたので、命拾いをしました。

また、夜間には山あいから桐生や伊勢崎方面の空が、空襲によって赤く染まっているのが見えました。

8月14日に、翌日ラジオで天皇陛下のお話があるという重大ニュースが入り、15日の昼ごろ、私たち家族や母屋の人も一緒になって、ラジオ放送を聞きました。しかし、山あいで電波が弱いこともあって、天皇陛下の話される声もとぎれとぎれで、内容も言葉も難しく、何を話されているのかほとんど分かりませんでした。家の人に聞くと、日本は戦争に負けたのだと知り、家族は泣いていましたが、私は子ども心にも、悔しいけれどこれからは怖い思いをしなくてもすむのだと安心をしました。

それ以後、東京に新しい家ができるまでの3か月間、群馬の家にお世話になりました。12月初め、村の農協のトラックで東京に戻ってきました。半年間の疎開生活でした。途中、そのトラックのタイヤが道路の溝にはまって動けなくなり、たまたま通りかかったアメリカ兵のジープに私の父が片言の英語で頼み、ジープがワイヤーをかけて溝から引き上げてくれました。

その時、アメリカ兵たちを初めて間近で見ましたけれども、トラックを引き上げようと一生懸命働いてくれている様子に、それまでただ恐ろしかったイメージが消えて、親しみに変わりました。帰京後、3学期の終わりに開進第三尋常小学校の6年生として戻り、友達と約半年ぶりに再会をいたしました。同級生は栄養失調で痩せていましたが、誰一人欠けることなく、皆元気だったのがうれしかったです。

最後になりましたが、戦争によってどこの国でも数えきれない尊い命が失われ、国が滅びたり、その国の自然や文化まで破壊されてしまいます。戦争は、まさに人間が人間でなくなり、残酷で、悲惨で、悲劇です。そして何よりも、世界各国が戦争を二度と起こさないように願うばかりです。戦争は、人々を不幸にします。戦争で幸せになる人は、誰一人としていません。

お聞き苦しい声でしたが、長時間ご静聴いただき、ありがとうございました。